

産地技術による生活空間演出のためのデザイン開発

浅川光臣・桜井孝美・森本恵一郎・平田俊也・内藤 融

Household Commodities Devised by the Peculiar Techniques
(created)* in Yamanashi Pref.

Mitsuomi ASAKAWA, Takayoshi SAKURAI, Keiichiro MORIMOTO
Toshiya HIRATA and Touru NAITO

要 約

時代のニーズを先取りした製品及び織物、半貴石や木材等県産二次製品を活用した目新しい製品を開発・提案し、開発の方法論を示唆すると共に先見性のある製品を例示するため、玄関をテーマにニット応用製品としてフロアランプ、衝立を、半貴石類応用製品としてシールボックス、オブジェを、木製品としてウォールポケット、装飾窓、窓見をそれぞれ開発試作した。

1 はじめに

人々の生活の高度化、個性化による市場の変化は、速やかに対応できる小規模企業にとって有利である反面、製品開発力を問われる。そこで、地場産業の持っている技術と材料を使って市場の需要を捉えた製品開発例を示し、業界の参考に供するため、住居の顔ともいわれる玄関の機能を満たし、感じよさを演出する小道具類を開発した。

2 ニット応用製品

織物製品は、既にインテリア用品として多用されているが、ニット製品は、機能面や物性面から衣料品以外の用途は狭い範囲に限られている。感性に重点を置くなかで、用途拡大の可能性を探るため素材の検討を行い、併せて開発試作した。

2-1 フロアランプ

フロアランプのシェードは、既に開発検討を終了しているランプシェード（昭和62年度、山梨県工業技術センター研究報告、第2号参照）と同様の編地設計、素材、加工とした。ラメ糸、蛍光糸と色の組合せ検討のため10点を試し編みした。柄は、玄関が来客を迎える場所でもあるので“ようこそ”と“Hallow”の2種類の文字柄とした。試作

品は、シェードについては、赤橙色の地に金色ラメ糸で“ようこそ”と編込み、巾約550mm、高さ450mmで自然形に造形してポリエステル樹脂をスプレーガンで吹きつけて固めたもの1点と青緑色の地に濃青色の糸で Hallow と編込み、直径330mm、高さ1060mmで円筒形にして皺でアクセントを造形して固めたもの1点計2点を製作した。あかりは厚さ45mmのケヤキ材の集成材を使用し、ようこその方は、200mm角、Hallowの方は直径230mmの板をオイル仕上げして電球を装着して作成した。モデル住宅を借りてセットした状況では、前者は申し分なく、後者は明るさが減殺されるものの共にムード照明としては趣のある仕上がりとなった。（写真1・2）



写真1 フロアランプ（ようこそ）



写真2 フロアランプ (Hallow)

2-2 衝立

住まいの内と外とを区分する空間形成の道具として伝統的に使われてきた。この機能は、現在の洋風の住居にも有効である。図柄は、富士山の四季をモチーフにした。春は6色、夏は8色、秋は11色、冬は5色の多色使いで、製作上は複雑になったが、美しい図柄ができた。試作品は、幅750mm、高さ900mmの木枠に、編地を表裏に貼った合板を差込み、別体の脚部にのせて固定する構造とした。テンション構造も検討したが、素材及び構造の強度に問題点があったので製作するに到らなかった。木部に表裏がなく、合板2枚に四季が納まるので、年2回差換えるだけでよい。尚枠の板厚は20mmと薄く、脚をつけないで壁掛けとしても趣のあるインテリア用品となる。(写真3・4・5・6)

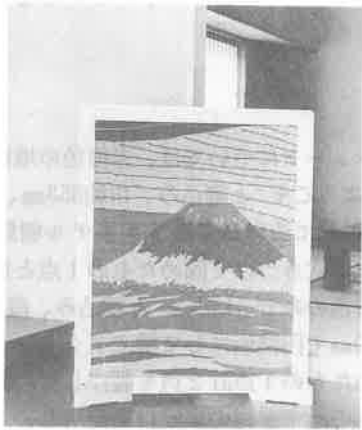


写真3 衝立(春)



写真5 衝立(秋)

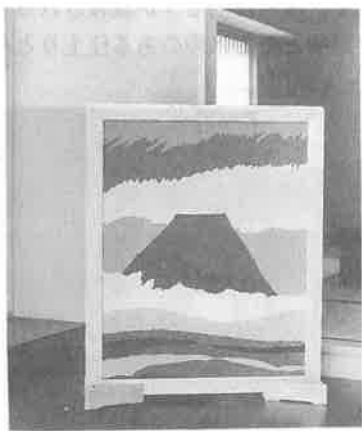


写真4 衝立(夏)

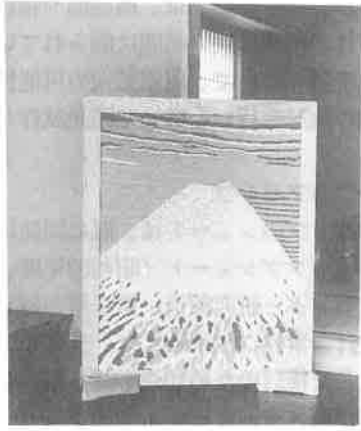


写真6 衝立(冬)

3 半貴石類応用製品

従来素材が使われている製品類を超えてノベルティ商品開発の可能性を追求した。玄関で使う用品類なので、装飾性を強調し、且つ適合する機能をもつものとしてシールボックス、オブジェを開発試作した。

3-1 シールボックス

玄関に置いておくと便利なものに印鑑がある。シューズボックス、明かり通りの窓付近の凹部等の上にさりげなく置きたい。角のとれた川原石又は、丸餅の素朴さを表現することを造形上のモチーフにした。材料は、色と文様が美しく、比較的加工性のよいジャスパー、ブルーカルセドニ、ピクチャーストーンの3種類とした。長径130mm、短径100mmの楕円形で高さ55mmとし、上下に2等分して、内部に銀製で金メッキを施した肉池と印鑑入れを装着した。嵌合は、真鍮に金メッキを施し

た丸玉を2個所に埋めて行う方法とした。重量感、豪華感があり、半貴石類のもつ個性的な魅力が溢れ、想定していた以上に興味深い製品となった。(写真7・8)

3-2 オブジェ

置き場所は、シールボックスと同様である。玄関のムードを高め、郵便物やちらし類の重しにもなるものを考えた。愛らしさ、スマートさを表現できる鳥をモチーフに、ナラ材、タモ材を用い、嘴から尾まで全長220mmで4種類を製作した。目は、縞めのを象嵌してアクセントにした。台は70mm角の黒御影石とし、鳥とは真鍮棒でつないだ。全高は、250mmである。試作品をみてやや大きすぎたかとも感じたが、実際にシューズボックスの上に置いてみたら程よく納まった。(写真9・10)

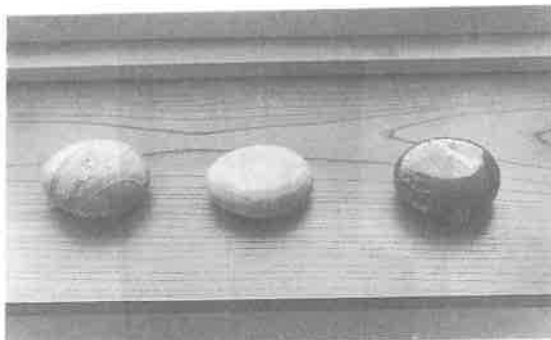


写真7 シールボックス

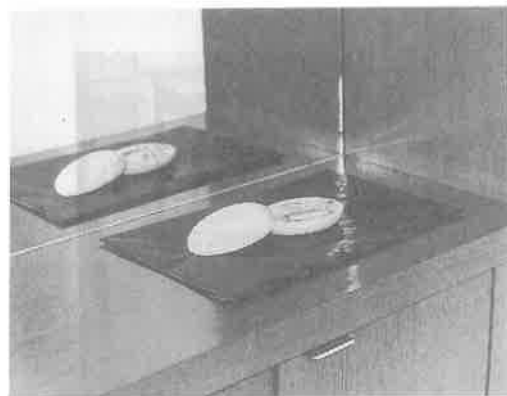


写真8 シールボックス (開蓋)

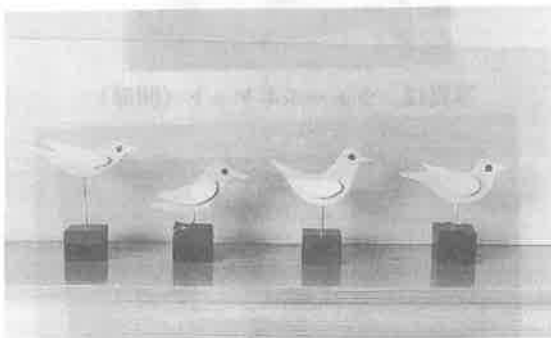


写真9 オブジェ



写真10 オブジェ (セット)

4 木製品

玄関用の家具、什器類は市場に沢山ある。機能性と装飾性という相反するアイテムを追求する中でノベルティ商品の開発を試みた。

4-1 ウォールポケット

玄関には様々な機能があるが、感じよく整理されていることが望ましい。又、一般的にスペースに余裕のある場所とはいえないので、効率よく収納できる什器類があると便利である。そこで、小物収納、メモの書ける小卓、スリッパラック、傘立、印鑑などをしまえる隠し、鏡、装飾品を置く棚の機能を併せもつ什器を考えた。寸法は、各機能を満たし、尚且つ最小にと検討した結果、幅800mm、奥行120mm、高さ1630mmとなった。製品自体が自己主張するのではなく、壁や扉に同化するようカバ材に一般的に多用されている切面と丸面を施し、軽く着色してポリウレタン樹脂塗装仕上げとした。試作品を見た限りでは、機能面で欲張っ

たが、大体想定した通りに使えることが解った。(写真11・12)

4-2 装飾窓

玄関のムードを高める窓状の製品である。扉を閉じておけば、あたかもそこに窓があるように見え、扉を開ければ、風景などの図柄が見える。照明を仕込んであるので、夜も図柄が見える。図柄は、板ガラスにスクリーン印刷でステンドグラス風に描いた。寸法は、幅700mm、奥行160mm、高さ620mmとし、ナラ材を用い、濃く着色してポリウレタン樹脂塗装仕上げとした。壁面に取付ける方法と照明を組込むため、奥行寸法が大きいので建築時に取付ける方法とが考えられる。図柄及び蛍光管は、前面から交換できる構造になっている。扉を外して脚を接合し、床の上に置く使い方もできる。試作品は、意図通りに仕上がったが、具体的な機能をもつ製品ではないので、市場獲得の可能性については充分検討しなければならない。(写真13・14)

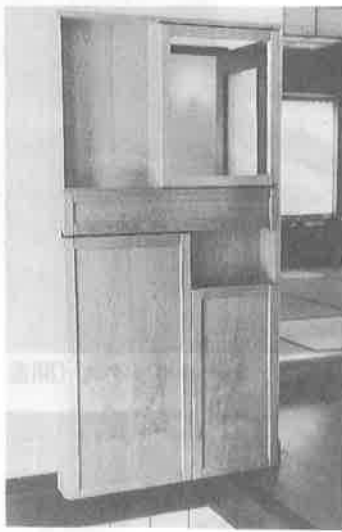


写真11 ウォールポケット



写真12 ウォールポケット (開扉)



写真13 装飾窓



写真14 装飾窓 (開扉)

4-3 姿見

外出時に身づくろいを確認するのに、玄関にあると便利な製品である。市場の製品にはない付加機能として、椅子状の座を設け、花台にしたり、時には踏台にもなるようにした。脚の前方にボールキャスターをつけ、簡単に移動できるようにした。寸法は、巾410mm、奥行(脚部)510mm、高さ1600mm、座の高さ400mmである。ナラ材の集成材を用い、生地色としポリウレタン樹脂塗装仕上げとした。試作品の状況は、寸法上は適当であったが、形状が平凡で面白味に欠けるので再検討を要する。(写真15)

5 おわりに

玄関とは、屋外と屋内の接点で土間とホールから成り、扉の外のポーチもその一部である。住居のなかで考え方が大きくわかれる場所ではなかろうか。1つは、必要最小限の機能を果たせばよいという考え、もう1つは、ゆとりのある空間にし、沢山の機能をもたせるという考えである。玄関での行為の1つ1つは、短時間で済むことなので、その行為をどう考えるかによりしつらえが変わる。我々が開発を試みたのは、合理的な玄関づくりの道具ではなく、面積の広狭とも関係ない心の安らぎ、精神的なゆとりをつくり出すための道具類で

ある。消費者の要求が高度化して自分流の生活を自分で演出する人々がふえているが、この傾向は必需の部屋から玄関等へ広がっていくであろう。又、多彩で洒落た小道具類の市場も益々拡大していくであろう。地場産業に携わる方々に、新製品開発の大いなる着眼点にして載せたいと考えている。又、我々の提案の中からヒントを得て戴ければ幸いである。



写真15 姿見